

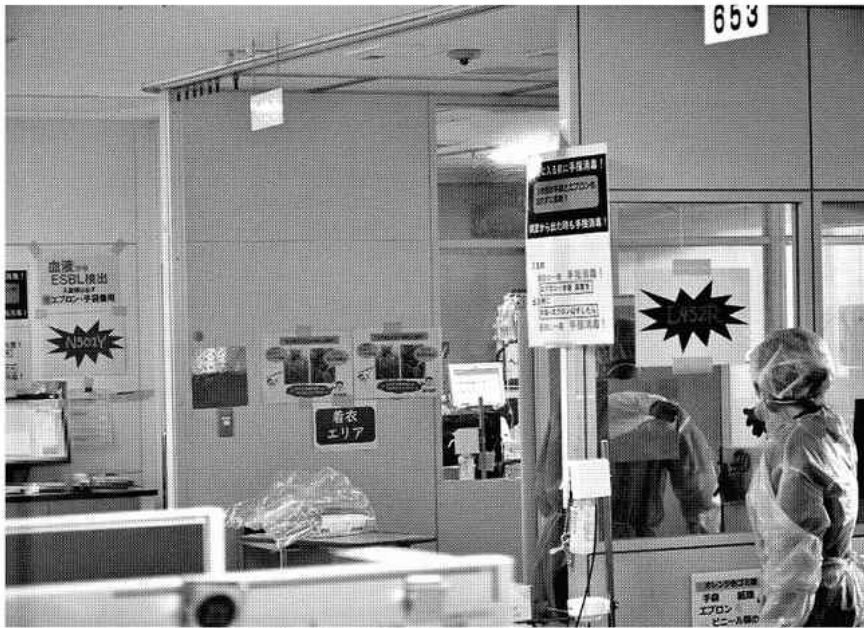
第5波並み想定、病院警戒

「病床切り替え、柔軟に」

新変異型、国内確認 ゾーニングも検討

新型コロナウイルスの新たな変異型「オミクロン型」が日本国内でも30日、初めて確認された。感染力は従来型より強いともいわれ、実態はまだ判然としない。水際での空港検疫で陽性者が見つかった段階だが、これまでの度重なる感染拡大で逼迫した医療現場や保健所では「第6波」への警戒感が強まる。(1面参照)

「まだ感染力の強さも」と同等の「波」を想定し、医科歯科大では30日まではっきりしない。第5波「ておくしかない」。東京に、付属病院などの関係



東京医科歯科大付属病院では夏の「第5波」で型ごとに病室をわけていた(8月)＝同病院提供

者約150人が集まり、オミクロン型に関する情報を共有した。

同大の東田修二教授(臨床検査医学)は「覚悟はしていた。いよいよ来たか、という気持ち」と話す。具体的な対策はまだ決まっておらず、当面は感染動向を注視しつつ、自治体の要請に応じて病床や人員確保の準備を進めるといふ。今後、市中感染が広がった場合は「第5波で病棟内を型ごとに分けたゾーニングも考える」とした。

大阪市立総合医療センターの白野倫徳感染症内科副部長は「オミクロン型への警戒前から、第6波が来ると想定し、一般病棟からコロナ病棟に柔軟に切り替えられるような体制を維持している」と話す。

大阪府の医療体制が逼迫した4〜5月、同センターでは集中治療室(ICU)病床などを重症患者向けに23床転用した。6月以降も20床を維持して第5波への対応に当たった。担当者は「今後も一般病棟の診療と両

立しながら、行政の要請に応じて柔軟な対応を取れるようにしたい」とした。

現状ではオミクロン型に感染した重症例は多くないとされるが、世界保健機関(WHO)は世界的に広がるリスクを「非常に高い」として警鐘を鳴らす。ワクチン接種による免疫の可能性はまだ研究途上としている。

大阪市内で重症患者を受け入れてきた病院の担当者は「それほど重症化率が高い変異型なのか、まず見極めたい」と話す。

東京都内の中規模病院では今まで通りオミクロン型患者も受け入れる方針を確認したものの、男性医師は「重症化抑制に

**店舗保証
フォーシーズ 4es**

ワクチンの効力が発揮されるかが分からないと、適切な医療体制を構築するのが難しい」と懸念する。

第5波では全国の療養者が10万人を超え、健康観察をしなければならなかった保健所の業務が逼迫した。

保健所は療養者の健康観察だけでなく、濃厚接触者や感染経路を調べる「疫学調査」も担う。兵庫県は10月末から県職員

1千人を対象に保健所業務の研修を進めており、感染拡大時に保健所に派遣して疫学調査に従事させる仕組みをつくる。

東京都北区保健所では、今後感染が拡大した場合に備え、陽性と判明した患者への連絡などを担う職員を大幅に増やす予定だという。ただ「政府が想定する以上の陽性者数となった場合、医療機関との連携が必須な自宅療養支援に対応できるだろうか」と前田秀雄保健所長は懸念する。

政府はオミクロン型の拡大を抑えるため、陽性か陰性かを判断するPCR検査に加え、型を判別するゲノム解析をできるだけ多くの陽性者に行うよう求めている。

保健所は陽性者の検体を専門機関に送り、迅速に判定する必要がある。

前田所長は「オミクロン型かどうかの特定は初期段階では重要だが、感染拡大が深刻になった場合は判定する意味がなくなる」と指摘した。